

Why the Urban Design must be Unconventional and Fluid? — Tamura's "Anti-theoretical urban design" and its impact on the city planning in Japan

邦題：「なぜ都市デザインは非定型流動でなければならないのか — 田村明の「反理論的都市デザイン」の日本の都市計画におけるインパクト」

<導入>

現在、IPHSでの報告に向けた準備のために、これまで執筆を続けてきた修士論文の内容の一部を加筆・修正することで報告原稿に当てようと考えております。このレジュメではその概要について説明します。とはいえ、修士論文の執筆自体もまだ終わってはならず、そちらと並行しながらの作業なので、現状の内容にもまだまだ不備があることは否めません。皆様からのコメント・ご意見等を頂戴できれば幸いです。

<概要>

脱工業化とグローバル化によって、好むと好まざるとを問わず、都市は都市間の激しい競争に巻き込まれるようになった。イギリスの社会理論家のデヴィッド・ハーヴェイが語るように、そうした社会情勢においては、「地元の開発や雇用増の育成及びその助長に関する新たな方策を一貫して追求する」という「企業家主義的」都市経営が主流となる(Harvey 1989=1997: 36)。都市社会学者の町村敬志は、国内外の都市間競争の激化によって、都市内のアクターは危機意識や成長願望を共有しつつ、結びつきを強めるようになったという。そして結びつきを強めた集団は、都市の魅力を高めるべく外部資源の獲得や各種施設の誘致に努め、またこうした共通の努力の達成に、利害の調整と統合が不可欠となってきたという(町村 1994: 107)。

つまり現代はいままで以上に「都市の魅力とはなにか」とか「いかに都市の人々の利害を調整するか」ということが、喫緊の課題となって都市に突きつけられるようになったのである。我々はそんななかでどのような都市の姿を描き続ければよいのだろうか。田村明はその83年の生涯において、そうした問いに挑み続けた人であった。

田村は1968年に横浜市に奉職し、その経験をもとに数多くの論考や著書を残し、のちに「まちづくりの伝道師」と呼ばれるようになる。しかしそうした旺盛な執筆活動にも関わらず、田村のまちづくりに体系的な理論はない。そして一見して明らかのように、田村の著作は誰もがわかるような平易な言葉で都市計画について語っている。体系的な理論がなく、平易な言葉で語るということは、啓蒙的ではあるけれども、多様な解釈を読者に許すものである。それは理論が理論たるべき普遍性を自ら否定してしまっているかのようである。いったい田村は、横浜市という実践の場を失いながら、なにを後の世代に伝えようとしたのか。田村明はアーバンデザインについてこう語ったことがあった。

「アーバンデザイン」を「都市設計」という人もある。「デザイン」を「設計」と翻訳した

いわけだ。「都市設計」という言葉は、住宅公団の団地や駅前再開発計画のように、一つの主体が建築・道路・緑地などをあわせた複合体を設計する場合なら適当かもしれない。だが、ここで言うアーバンデザインでは、多様な主体が前提であり、かんたんに設計はできない。また、細かくものの姿形を図面で決めてしまうのは最後の段階の仕事だ。それよりも、市民が協働して街を美しく個性的にするために、意識を高め、将来の方向を考え、方法を議論し、話し合いを繰り返し案を立て、納得いくように修正し、ルールを定め、皆の役割を決めるなどの多くの段階が必要だ。アーバンデザインに取り組むのは専門家だけではない。だが最初から「設計」を名のってしまうと、図面が引け設計のできる専門家だけの領域になってしまう(田村 1997: 116)

「都市をデザインする」という言葉が語られるとき、ときに一体的に建造物の配置や緑地を整備することによって景観を整えることが想起されるかもしれない。しかしその景観は誰にとって好ましい景観なのだろうか。景観に対する意味づけを特定の主体が一義的に決めてしまうことに田村は注意を促してきた。だからこそ自らのまちづくりの読者に対して「都市をデザインする」とは、「調整すること」なのだと繰り返し強調してきたのである。

田村の都市デザインの本領は、制度化や組織化がされていないものを柔軟に運用することにあつた。それでこそ田村は自らのアイデアを最大限に活かすことができたともいえる。しかしインフォーマルな領域での創意工夫は、法律に定められた＝フォーマルな都市空間のコントロールに吸収され、本来持っていた意義を喪失してしまう。要綱行政に対する組織内部からの反発にも明らかに見てとれるように、法定化や規範化が進めば進むほどに、田村の志向した「非定型流動」な都市開発は困難になってゆく。

飛鳥田市政が終焉を迎え、フォーマルな都市空間のコントロールを重視する細郷市長が就任すると、田村が横浜に持ち込んだ「都市デザイン」は、現実的な都市開発を行うためのフォーマルな組織である「都市デザイン室」と、田村の語る理想を引き継ごうとするインフォーマルな勉強会である「まちづくり研究会」へと分岐した。田村は細郷市政以降、都市デザインの実践に関わることはなくなった。むしろインフォーマルな形で自治体職員に対して自らの経験を踏まえた都市デザインの「本質」を語るようになった。

まちづくり研究会に集った職員たちは、田村の語る都市デザインの本質を、従来の常識にとらわれない「企画」とそのための市役所内外の人々の「調整」にあると見た。それは「公」と「私」という行政の枠組みを意図的にはみだすことで、地域を活性化させる最前線に立ち、田村の語り続けた理想的な都市の姿を自分たちなりに描こうとした営みと言えるだろう。

インフォーマルな部分でこそ柔軟な都市の「企画」と利害の「調整」が可能になる。だからこそ田村の理論は体系的ではなく、また体系的であってはいけないのである。本報告はその理論的源泉を1960年代のジャーナルから2000年代の著作を素材として、「なぜ田村明の都市計画論には体系的な理論がないのか」ということを明らかにすることを目的とするものである。

<文献>

- Harvey, D., 1989, "From Managerialism to Entrepreneurism: The Transformation in Urban Governance in Late Capitalism" *Geografiska Annaler. Series B. Human Geography*, 71(1): 3-17. (=1997, 廣松悟訳「都市管理者主義から都市企業家主義へ—後期資本主義における都市統治の変容」『空間・社会・地理思想』2: 36-53.)
- 町村敬志, 1994, 『「世界都市」東京の構造転換』東京大学出版会.
- 田村明, 1997, 『美しい都市計画をつくるアーバンデザイン』朝日選書.